

2024年度 年次報告書



第71回全国民俗芸能大会
「宇原獅子舞」宇原獅子舞保存会（兵庫県宍粟市）

一般財団法人 日本青年館

I. 公益活動

1. 青年活動振興事業

1) 第 72 回全国青年大会

全国青年大会は、サンフランシスコ講和条約発効を記念して 1952（昭和 27）年に第 1 回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ、文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加する大会です。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置いて、平和で文化的な住みよい地域づくりを目的にこれまで事業を実施してきました。



第 72 回全国青年大会は 11 月 8 日（金）から 11 日（月）にかけて開催しました。今年は、2019 年以来 5 年ぶりとなる開会式を実施。瑤子女王殿下のご臨席を賜った他、武部文部科学副大臣にもご出席をいただきました。開催種目は体育の部ではバスケットボール、軟式野球、剣道、フットサル 4 種目と、芸能文化の部では写真展、生活文化展、意見発表、舞台発表 4 種目の計 8 種目に加えて、交流種目としてボッチャを実施。剣道男女と意見発表、舞台発表では参加人数が増えたものの、参加者数は 952 名となり昨年度より 141 名減少となりました。今年は能登半島地震復興支援をテーマに、開会式で石川県七尾市から参加した「飯川天狗太鼓」に太鼓を披露していただいたほか、外苑マルシェでは通常の出品物とは別に、能登半島地震復興支援のために各地から持ち寄ったお菓子詰め合わせセットを 100 セット作成。300 円で販売したところ完売し、売上金は全額石川県団に贈呈しました。

2) 全国青年問題研究集会（全国まちづくり若者サミット 2025）

2023 年度から「青年問題研究集会」（青研集会）を青年館が主催する「全国まちづくり若者サミット」と合同開催しています。2024 年度は 3 月 1 日・2 日に開催し、参加者は 107 名、うち青年団関係者は 36 人でした。

今回の若者サミットでは、二日間のワークショップや事例発表を通じた学び合いを通じて、



参加者は自身の考えを深め、次の活動への展望を描くことができました。

3) 全国地域青年「実践大賞」

「全国地域青年『実践大賞』」は、全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰するもので、全国の青年団や教育委員会などを通じて応募を呼びかけています。今年度は9県29件の実践の応募があり、昨年度より3県16件の増加となりました。受賞した実践は下記のとおりです。

<大賞>

高知県青年団協議会

「高知家多文化共生まちづくりプロジェクト」

■実践概要

高知県内で増加している技能実習生や留学生といった外国籍の人々が直面している、孤独や生活への不安、地域住民との交流不足を解消することを目的に始まった実践です。国籍に関係なくお互いを尊重し、地域社会に溶け込むための交流の場を提供しています。活動は、県内各市町で実施されました。

プロジェクトは、外国籍人口の最も多い土佐市でスポーツ交流会行うことから始まりました。また、地元の専門学校と連携し、「高知家の入学式・運動会」を実施し、地域住民と留学生が交流する機会を設けたことで、高知の文化や風土を理解してもらうことにつながっています。さらに、地域の文化を体験できる「よさこい祭り」に外国籍の方々に参加してもらうことで、祭りを通じて高知の文化に親しむとともに、交流を深めています。

<田澤義鋪賞>

高知県青年団協議会

「学びのココロプロジェクト」

■実践概要

「学びのココロプロジェクト」は、青少年の居場所づくりをめざす取り組みで、子どもたちが安心して過ごせる場所を提供することを目的に行われたものです。プロジェクトは、地域の青年団や社会福祉協議会、大学生団体などと連携して実施されました。特に不登校や家庭環境に悩む子どもたちに対して、学習支援や相談できる場を設け、子どもたちと若者との交流を促進しました。

活動は月に一度、子どもたちを集めて勉強会やレクリエーションを行う形式で、最初は少人数からスタートしましたが、参加者の口コミで徐々に人数が増加。プロジェクトでは、大学生や青年団が指導役となり、子どもたちとの交流を通じてリーダーシップを学ぶ機会にもなりました。また、地域のイベントとも連携することで、地元住民と若者が協力して活動を展開することにつながっています。

<全国青年団OB会奨励賞>

富山県五箇三村連合青年団 映画『HAGAYASHI』

■実践概要

人口が減っていく中、「隣地域の青年団と一緒に活動しよう」「五箇山は一つ」をモットーに、五箇山地域みんなで一つの作品を作りたい、そして後世にも残したいという思いで五箇山（上平・平・利賀の三つの地域の総称）を舞台に、三村の青年団がオリジナルフィクションの自主映画を制作しました。脚本作成から主題歌の作曲まで青年団で行っています。1月25日には試写会を開催し、来場者からは「青年団が盛り上がると地域が盛り上がる」「みんなで制作したっていうのが伝わる作品」「全員を肯定する描写や五箇山の景色がきれいに映し出されてすごかった」という感想がありました。

4) 北方領土返還運動

(1) 第55回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の開催

日本青年団協議会は1966(昭和41)年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970(昭45)年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会（現・全国女性団体連絡協議会）とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を開催してきました。

今年度は2024年7月13日（土）～15日（月・祝）にかけて標記集会を現地に於て開催し、60人が参加しました。今年は、プログラムのほとんどを標津町や羅臼町など根室市周辺の自治体で行い、元島民や地元漁業者からの講話のほか、地元料理づくり体験を通じた女性会との情報交換、また、船上視察ではロシアとの中間地点まで接近し、国後島を臨むことができました。

5) 国際交流事業

日本青年団協議会は1956(昭和31)年より中華全国青年連合会（全青連）と交流を行っています。また、韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流は、2012年に（社）中央青少年団体連絡協議会（中青連）の解散を受け、中青連事務局機能の役割を担う日本青年団協議会が韓青協との交流事業を2015(平成27)年から承継し実施しています。

全青連との交流では、2024年8月10日（土）～13日（火）にかけて北京で行われた「世界青年発展フォーラム」に全青連から招聘を受け参加しました。フォーラムでは、よりよい社会に向けた取り組みの紹介や文化発表等が行われたほか、昼食と夕食のレセプションでは、中国共青団の阿東主席、全青連の徐曉主席らと、今後の日本と中国の青年交流について意見交換ができました。

また、中華人民大学での分科会では「持続可能な開発と財源」というテーマの下、青年団が地域で行う資金集めに関してスピーチを行いました。

韓青協との交流では、2024年12月5日（木）～8日（日）にかけて5年ぶりに代表団4名を受け入れました。期間中には、日韓文化交流基金、文部科学省、荒川区の青少年団体を訪問し、日韓の青少年教育や社会教育についての意見交換を行いました。また、宮城県青年団連絡協議会の佐藤会長と日本青年館で意見交換するなど、地域の青年団との交流も行いました。

6) 日青協運営検討委員会

2023(令和5)年度に設置された日青協組織再建検討委員会の答申を受け、2024(令和6)年度には日青協運営検討委員会を設置しました。委員にはコアメンバーや道府県団理事だけでなく、市町村団員にも入っていただいているほか、昨年度に引き続き日本青年館加藤義弘理事や、澁谷部長

にも出席いただき 13 名のメンバーで、これまで 4 回の会議を実施しました。

本委員会は、答申で示された提案を具体化することを目的とし、主に執行部再建に向けた規約改正について議論を進めました。

こうした運営検討委員会での議論をふまえ、新たな執行体制構築に向け、9 月の理事会や 12 月開催の理事会においても議論を重ね、道府県団理事からの執行メンバーを執行部と位置付けることや、外部からの視点を取り入れるためにも、外部団体からのメンバーを執行部が推薦できるような仕組みを導入することを決定し、5 月の定期大会で規約を改正することとしました。

2. 第 71 回全国民俗芸能大会

2024 年度の第 71 回全国民俗芸能大会は、11 月 23 日（土）、全国民俗芸能保存振興市町村連盟との共催事業として開催しました。日本で初めて地域の芸能を舞台で紹介したのが 1925(大正 14)年に初代日本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」でした。以来、これまでに 460 余の芸能を紹介してきました。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会です。

今大会は「獅子頭を用いた芸能」に着目し、企画委員会により 4 団体が選考されました。普及公演では、本公演では実施できなかった演目の上演に加え、獅子頭の使い方などについて出演者へのインタビューも行い、獅子舞の魅力を存分に伝え、全体を通して獅子舞だけではない「獅子頭をかぶって舞い踊る芸能」の多様性も紹介する大会となりました。昨年は舞台上で行われなかった表彰を開会式に続いて行い、内容をコンパクトにしつつも観覧者にも大会出演の意義が伝わるよう工夫しました。

今大会には青年団の出演をはじめ、どの団体でも若い方々の活躍が見られた点は特筆すべきことであり、これまでの伝承の努力が垣間見られました。

高屋敷神楽保存会は 3 月末に地元で凱旋公演を行いました。宇原獅子舞は第 44 回伝統芸能ポラ賞地域賞を受賞し、NHK 第 25 回地域伝統芸能祭り（3 月 2 日）への出演や、大阪万博で上演されるなど活躍の場がひろがっています。どの団体も大会後に地元で民俗芸能大会の出演報告会を行うなど、出演をきっかけに自信を深め、意欲的に取り組んでいるとの報告がきかれ、大会の意義を再認識するものとなりました。

今大会の観覧者数は 480 名でした。郵送や E メールでのダイレクトメールの送付に加え、新宿区・板橋区内の広報誌掲載や公共施設、出演団体の県のアンテナショップなどにチラシを配架しました。さらに、新たな観覧者の掘り起こしのため民俗学や民俗芸能を専攻する学生への働きかけを強めたほか、矢口悦子学長の仲介により東洋大学の留学生へ案内することができました。学生の観覧者は昨年の 1.5 倍程度に増え、一定の成果を上げています。

大会の概要は以下の通りです。

文化庁補助事業 第 71 回全国民俗芸能大会

日にち 2024 年 11 月 23 日（土）

会 場 日本青年館ホール

時 間 開 場 12:00

開会式・表彰	13:00～13:30
本公演	13:30～17:00
普及公演	18:00～20:00
入場料 本公演・普及公演通し券	1,500 円（学生無料／全席自由）
普及公演券	1,000 円（学生無料／全席自由）

本公演

『高屋敷神楽』高屋敷神楽保存会（岩手県一戸町）

『宇原獅子舞』宇原獅子舞保存会（兵庫県宍粟市）

『箱根宮城野湯立獅子舞』箱根宮城野獅子舞保存会（神奈川県箱根町）

『江尻獅子舞』江尻青年団（富山県高岡市）

普及公演 獅子舞の魅力～播磨の毛獅子と富山のむかで獅子～

『宇原獅子舞』

『江尻獅子舞』

【第71回全国民俗芸能大会企画委員】※敬称略

- ・齊藤 裕嗣（前文化庁伝統文化財課主任調査官・國學院大學兼任講師）
- ・俵木 悟（成城大学文芸学部教授・東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員）
- ・神田 竜浩（日本芸術文化振興会 国立劇場制作部公演計画課主任専門員）
- ・久保田裕道（（独）国立文化財機構 東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長）
- ・伊藤 純（川村学園女子大学講師・東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員）
- ・高久 舞（帝京大学文学部日本文化学科講師）
- ・吉田 純子（文化庁文化財第一課芸能部門 主任文化財調査官）
- ・山中千紗子（文化庁文化財第一課芸能部門）
- ・橋本かおる（文化庁文化財第一課芸能部門）

3. 月刊誌「社会教育」の発行

「社会教育」の発行は、下記のような内容・発行部数で毎月発行しました（定価4月号から据置）。
（普通号 定価935円：本体850円 増大号 定価1430円：本体1300円）

1) 特集内容

4月号(934号) 特集 ウェルビーイングの実現を目指すための社会教育の役割

（普通号935円）96頁

※4月号以降裏表紙(表4)に明治安田生命保険相互会社が継続して広告出稿となる。

また同社106カ所の支社にも送付する。

5月号(935号) 総力特集 こども・若者に社会教育は何かできるのか

（増大号1430円）144頁

6月号(936号) 特別企画：社会教育法75周年(1)

（普通号935円）96頁

7月号(937号) 特別企画：社会教育法 75 周年(2)	(普通号 935 円) 96 頁
8月号(938号) 特集 地域・学校・社会教育の魅力化 学校をハブとして地域の魅力づくり 特別企画：社会教育法 75 周年 (3)	(普通号 935 円)96 頁
9月号(939号) 特集 人と人をつなぐメディア 特別企画：社会教育法 75 周年 (4)	(普通号 935 円)96 頁
10月号(940号) エリア特集：栃木県社会教育 テーマ特集：青少年の活動動向 特別企画：社会教育法 75 周年 (5)	(増大号 1430 円)144 頁
11月号(941号) 特集 注目！ 図書館総合展 特別企画：社会教育法 75 周年 (6)	(普通号 935 円)96 頁
12月号(942号) 特別企画：社会教育法 75 周年 (7) 社会教育法を読む 知る 考える	(普通号 935 円)96 頁
1月号(943号) 特集 「生涯学習論 2025」 諸課題にどう対処するのか	(普通号 935 円)96 頁
2月号(944号) 特別企画 社会教育の未来を語る 社会教育にイノベーションを起こそう！	(普通号 935 円)96 頁
3月号(945号) 特集 2024 年度の社会教育・生涯学習の総括と 2025 年度への展望	(普通号 935 円)96 頁

2) 連載執筆者と読者との交流をはかる「オクトーバー・ラーニング 2024」の実施

2024 年 10 月 1 日から 31 日にかけてオンラインと対面にて 7 回実施しました。内容は以下のとおりです。

- 10 月 2 日 「オープニングイベント」
- 10 月 5 日 午前「ウォーキング」
- 10 月 5 日 午後「上映会」
- 10 月 10 日 「読者交流会」
- 10 月 15 日 「10 月号栃木県特集連動企画」
- 10 月 26 日 「やさしい日本語」
- 10 月 31 日 「クロージング」

全国各地の読者の皆様と地域を越えてつながり、今後の本誌の企画づくり、購読者の拡大に向けて、オンライン活用についての一定の成果、手ごたえを感じることができました。

3) 社会教育の架け橋 Vol.3

9 月 21 日(土)に雑誌「社会教育」編集部がハブとなる形で、「社会教育の架け橋 VOL.3」を開催しました。この事業は、「はじめよう、社会教育士」「社会教育 Start Up Lab」という社会教育士を取得した方々による団体と、これまでオンラインで開催してきた企画の初の対面交流企画として、飲食を伴いながら交流をはかる内容としました。首都圏を中心に自治体や NPO、企業などから 52 名

が参加、社会教育士のネットワークづくりという行政の施策もあり、文科省からも担当課長ほか5名が自主的な形で参加されました。

なお、この企画を読売新聞東京本社教育部が取材し、10月10日「教育ルネサンス 社会教育は今 3」にて紹介されました。

4. 青年問題研究所

地域の青年集団を再生し担い手を育成することを目的に、青年問題に関する調査・研究活動を行うほか、地域青年活動のプラットフォームの役割を日本青年館が果たすため、専門家等による統括会議で意見交換を行い、青年活動等に関する調査・研究を行うとともに、それらを踏まえた研修事業や事例の発信を行ってきました。

1) 統括会議

若者を対象とした自治体の取り組みにより、若者グループなどが数多く生まれている一方で、継続性や主体性が課題となっています。そうした若者たちを応援するための政策提言を執筆するべく議論を重ねました。作成した提言は文部科学省をはじめ地方自治体などの公的機関に送付するほか、各政党青年局や関係団体への働き掛けも視野に入れています。各回の日程および主な協議事項は以下の通りです。

2024 年

- 第1回 5月16日 若者サミットの成果と課題
今年度の調査活動について
- 第2回 7月24日 政策提言の内容について
- 第3回 9月24日 政策提言の内容について
- 第4回 12月12日 現代青年を取り巻く現状や課題について（辻委員提起）

2025 年

- 第5回 1月23日 若者施策に関する動向について（青山鉄平氏提起）
- 第6回 2月11日 政策提言の内容について（～12日まで）
- 第7回 3月1日 政策提言の内容について

<2024 年度常任研究員>

- 井口 啓太郎 （国立市教育委員会）
- 岡下 進一 （元日本青年団協議会会長）
- 奥 ちひろ （秋田県南 NP0 センター）
- 島田 茂 （元日本YMCA同盟総主事）
- 辻 智子 （北海道大学准教授）
- 前田 昇 （認定 NP0 法人本の学校副理事長）

2) 全国まちづくり若者サミット 2025

2025 年 3 月 1 日から 2 日にかけて標記事業を開催しました。申し込み総数は 107 名。20 代 30 代

が3分の2以上を占めたほか、高校生の参加も5名ありました。青年団の参加者は36名、それ以外の参加者が71名となりました。

青年団や若者団体など幅広い属性の若者たちの中から実行委員を募り、企画や運営を若者自身が担いました。6月から実行委員会を開催し、33回の実行委員会を10名の委員によって開催し、プログラムを作り上げていきました。なお、オンラインでの配信は実施しませんでした。

<実行委員会>

伊藤千夏（三丁目の家、神奈川大学）、宇佐原嘉晃（未来守、立命館アジア太平洋大学）、大内陸久（NPO 法人やくも元気村）、鴨志田早織（ひたち若者かがやき会議）、皿谷倅也（南陽青年団、五霞町地域おこし協力隊）、下鶴賢太郎（社会福祉法人麦の里、元別府大学青年団）、鈴木悠里（学生団体 YUZU OG）、文屋実（富谷市青年団）、八木雅弘（岡山県青年団協議会）、吉川智也（大田区若者会議、高校生）

今回のサミットのテーマは「あなたは何をプラスワンしますか？」とし、サミットで得たアイデアや人脈を地元を持ち帰りネクストアクションに繋げること、参加者一人一人の可能性を広げてさらなる成長に繋げること。全国各地から集まる様々な背景を持った参加者一人一人が学び合うことを目指し、プログラムを構築しました。

今年度のサミットでも参加者間の対話を重視し、初日はお互いのことを知るために、地域を切り口に自らのことを語り合うトークセッションを行いました。また円形の模造紙「えんたくん」といったツールを使いながら、参加者同士の情報を可視化し、共有を行いました。

その後ゲストトークとして、史上最年少の市長となった兵庫県芦屋市・高島峻輔市長をお招きし、「わたしの考えるプラスワン」をテーマにお話を伺いました。その後のプログラムでは自分とまちの関係より深く考えるためのワークを行い、自分の強みや弱み、まちの魅力や課題などを認識し、自分のまちで自分のできることを仮説立てを行いました。

2日目は、3つの部屋に分かれて、それぞれ3団体による事例発表を聞きました。最後にネクストアクション宣言と題し、1日目に考えた「自分のまちで自分ができること」の仮説や、2日目に聞いた事例発表から自分のネクストアクション宣言を立て、それぞれ次の目標を明確化し持ち帰りサミットは閉幕しました。

<プログラム>

[3月1日]

13:00-13:30	オープニング
13:30-13:45	アイスブレイク ～自己紹介ビンゴ～
14:45-14:40	ワーク①みんなのことを知ろう
15:00-16:15	ゲストトーク 高島峻輔氏（芦屋市長） 「わたしの考えるプラスワン」
16:30-18:05	ワーク②～自己とまちの深掘り分析～
18:05-18:15	1日目の振り返り

- 18:40-20:40 交流会（9階レストラン）
- [3月2日]
- 9:00- 9:15 1日目の振り返り
- 9:30-13:00 事例発表（各部屋に分かれて分科会方式で話を聞く）
- 【グループA：ルームイエロー】
- ① 三丁目の家（東京都多摩市）
 - ② 椎葉村青年団連絡協議会（宮崎県椎葉村）
 - ③ YOUKEY プロジェクト（新潟県南魚沼市）
- 【グループB：ルームブルー】
- ① さっぽろまなびまくり社（北海道札幌市）
 - ② Share 金沢（石川県金沢市）
 - ③ 土佐市青年団（高知県土佐市）
- 【グループC：ルームグリーン】
- ① 富谷市青年団（宮城県富谷市）
 - ② 水谷浩子さん（茨城県つくば市）
 - ③ とっとり若者地方創生会議（鳥取県鳥取市）
- 13:00-14:00 昼食
- 14:00-14:50 ワーク③～ネクストアクション宣言～
- 14:50-15:20 2日間全体のまとめ
- 15:20-15:30 クロージング

3) 若者施策担当行政職員向けオンライン対話会

「若者会議」など、若者による多様な取り組みが自治体のサポートを受けながら広がりつつある一方、継続性や若者の主体性など課題も抱えています。そうした課題を共有し、経験に学び合うことをねらいとして、若者を担当する行政職員によるオンライン対話会を2回開催しました。概要は以下の通りです。

回数	日にち	参加者	話題提供
第1回	9月10日	12自治体13名	一般社団法人NELD（神奈川県横須賀市）
第2回	12月20日	9自治体12名	新城市市民自治推進課（愛知県新城市）

対話会では互いに抱えている課題を共有し、若者の巻き込み方、主体的な意思決定、世代交代などの課題や若者施策の在り方などについて意見交換しました。

5. 図書・資料センター

日本で唯一、戦前・戦後期の地域青年団活動資料を多数所蔵する当館の図書・資料センターは、財団設立4年後の1925（大正14）年に建物の竣工とともに付設されました。当時は、数少ない一般公開の図書館として一般市民にも広く活用されていました。近年は、社会教育関係者、歴史学や民俗学研究者、大学生、自治体史編さん関係者、メディア関係者等多くの方々に利用され、貴重な役割を担っています。今年度は、以下の作業を進めてきました。

1) 資料室の閲覧および問い合わせ

今年度の閲覧、問い合わせなどは以下のとおりでした。s

(1) 来館での閲覧件数と内容

研究者…11 件（歴史学、社会教育、民俗学、女性学）

大学院生…3 件（戦後青年団、女性学、日中関係） 計 14 件(21 人)

(2) メール、電話での問い合わせと対応

研究者…5 件、青年団OB…2 件、自治体史編纂室…1、地方放送局…1

その他…3 件 計 12 件

2) 所蔵フィルム・写真などの利用状況

日本青年館所蔵の戦前フィルムはNHK アーカイブスにも保存され、NHK 番組制作において利用されています。今年度、日本青年館所蔵フィルムが利用された放送は 16 本でした。2025 年はラジオ放送が始まって 100 年ということもあり、番組における戦前フィルムの利用も昨年よりも多くなりました。利用された番組内のエンドロール等に「資料提供：日本青年館」などのクレジットが表記されました。また、NHK の番組「ファミリーヒストリー」では、広島県福山市の一般公募のファミリーヒストリーを追跡する中で、山本瀧之助について解説する場面があり、青年団と山本瀧之助の功績について佛木常務がインタビューに応じました。

その他日本青年館の概観やホールの写真、戦前の雑誌『青年』を資料として番組や記念誌などで利用するなどの事例は 4 件となっています。

6. 高校オーケストラ活動支援事業

日本青年館で第 1 回目のオーケストラフェスタが開催されたのは 1995 年 1 月のことです。1998 年には全日本高等学校オーケストラ連盟が結成され、青年館と学校の先生と音楽家が協力し全国的なネットワークづくりと交流の場づくりに取り組んできました。

1) 第 7 回全国高等学校サマーオーケストラ

交響曲を作り上げるための実践的な指導を通じ、高い技術と音楽性を身に着けることを目的に標記事業を実施しました。毎年、募集開始と同時に定員締め切りとなっている状況を踏まえ、今年の夏より 2 回開催とし、A 日程(8/11-14) B 日程(8/15-18)の 2 日程で実施しました。応募開始と同時に定員を大きく超える 260 名のエントリーが殺到したため録音審査を実施し全国 35 校から 158 名が参加しました。

最終日には一般公開にて富士吉田市のふじさんホールで特別演奏会を開催。M. グリンカの歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲と J. ブラームスの交響曲第 2 番を演奏し 4 日間の成果を披露し好評を得ました。

2) 第 31 回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ

高校オーケストラの祭典『全国高等学校選抜オーケストラフェスタ(通称「オケフェス」)』を 12

月 25 日～28 日の 4 日間にわたり、日本青年館ホールで開催し全国 82 校 76 団体より 3,890 名が参加しました。初出場校は東京都晃華学園中学校高等学校、東京都立八王子東高等学校、熊本県立熊本高等学校の 3 校で、参加校数としては史上最多、参加者数は前回大会より 120 名増加しました。

各校から選抜された生徒によって編成される選抜合奏は、25・26 日の A 日程オーケストラが 106 名、弦楽アンサンブルが 50 名、27・28 日の B 日程オーケストラが 106 名、弦楽アンサンブルが 45 名の生徒によってそれぞれ編成されました。演奏曲目と指揮者は以下のとおりです。

<選抜弦楽アンサンブル>

演奏曲目 P. I. チャイコフスキー／弦楽セレナーデ ハ長調 Op. 48 第 1 楽章

指揮者 永峰 高志(国立音楽大学教授 元 NHK 交響楽団首席ヴァイオリン奏者)

<選抜オーケストラ>

演奏曲目 M. グリンカ 歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲

J. ブラームス 交響曲第 2 番 ニ長調 Op. 73 第 4 楽章

指揮者 河地 良智(洗足音楽大学名誉教授・前同大学副学長)

期間中、文部科学省総合教育政策局長茂里毅様から挨拶をいただいたほか、弦楽器専門誌サラサーテでオケフェスの特集記事が組まれました。今年も、ホール 2 階席限定で選抜合奏や各校の演奏の有料鑑賞を実施したところ、2,980 名が来場。過去最多の来場者数を記録しました。これまで客層の中心だった保護者に加え、OB・OG や一般の来場者が増加しており、オケフェスの認知はますます広がってきています。

年明け 2 月にはコロナ禍をきっかけに始まったオンライン開催を実施。遠隔地で参加が難しい学校はオンラインで動画を提出し、ホール参加校の演奏と選抜合奏動画と併せて 2 月 21 日～3 月 31 日までオーケストラ連盟の公式 YouTube チャンネルで公開しました。

3) 全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演 2025

今年も 3 月 24 日～3 月 30 日の日程で「全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演(通称：ウィーン隊)」を実施しました。全国の中高生による選抜オーケストラを組織しウィーンを訪問しました。参加者は中・高校生 56 名・教員 3 名・保護者 7 名・日本青年館 1 名・撮影班 1 名、看護師 1 名、添乗員 3 名、指揮者 1 名の総勢 73 名でした。

公演に先立ち、第 1 回国内練習会を 2 月 22 日(土)～23 日(日)、日本青年館会議室にて実施しました。また、3 月 22 日(土)より山中湖畔荘ホテル清溪で直前合宿を行った後、夕方に羽田空港を出発しオーストリアへ向かいました。

プログラムについては、前プロでグリンカのルスランとリュドミラ序曲、中プロでメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲の全楽章、メインでは J. ブラームスの交響曲第 2 番全楽章を演奏し、史上初となるフルプログラムの演奏会となりました。

ソリストにはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 第 1 ヴァイオリン首席奏者のマクシム・ブリリンスキー氏を招いてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地である楽友協会のブラームス・ザールで実施しました。当日客席は満席で大盛況のうちに演奏会を終えることができました。

さらに翌日には、ウィーン・フィル等に在籍するプロの演奏者との交流会も開催しました。

7. 第29回清溪セミナー

1) 第29回清溪セミナー

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきた本セミナーは、青年団出身の若手政治家の手によって1997年2月に第1回目が開催されました。大きな特色の一つは、全国から選出された実行委員による自主的な運営であること。二つ目は、参加者の声を活かし時宜を得たテーマを設定し、本セミナーの趣旨をご理解いただく専門の講師をお招きしていること。三つ目は超党派であることが挙げられます。

今年は10月22日～23日に対面参加を中心にしながらもオンライン受講（ライブ視聴とオンデマンド視聴）も設定して、全国のどこからでも参加できるハイブリット方式で開催しました。衆議院選挙期間中となったため、参加者数は対面参加が60名、オンラインはライブ視聴が4名、オンデマンド視聴が35名と前年度より減少しました。

今年度は「環境」をテーマに取り上げ、オーガニック給食やゼロカーボンシティなどの自治体の取り組みのほか、新しいごみ処理の方法や世界規模で環境活動をする活動家を呼ぶなど幅広い講師陣をそろえました。

<10月22日>

講義Ⅰ 演目：「進化する里山資本主義」

講師：藻谷 浩介 氏（地域エコノミスト）

講義Ⅱ 演目：「オーガニック給食の実践」

講師：鮫田 晋 氏（いすみ市農林課有機農業推進班班長）

講義Ⅲ 演目：「ゼロカーボンシティを目指して」

講師：太田 昇 氏（岡山県真庭市長）

<10月23日>

講義Ⅳ 演目：「微生物の力で燃やせるごみをエネルギーに再資源化」

講師：見澤 直人 氏（エビス紙料株式会社代表取締役）

講義Ⅴ 演目：「SDGsの行政実務での活用」

講師：高木 超 氏（慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科特任助教）

講義Ⅵ 演目：「未来の子どもたちへ地球を引き継ぐために」

講師：谷口 たかひさ 氏（環境活動家）

2) 清溪セミナー大竹市・広島市現地視察

1月22日（水）～23日（木）に1泊2日で広島県大竹市と広島市で現地視察を行いました。大竹市では住民主導の公共交通政策や、広島市の平和推進政策などについて市の担当職員などから話を伺い、現場視察を行いました。期間中には実行委員会も開催され、来年度の10月に開催される第30回清溪セミナーのテーマや講師案などについて意見交換を行いました。

8. 田澤義鋪記念会

田澤義鋪（1885（明治18）年～1944（昭和19）年 日本青年館第5代理事長）は、25歳で静岡県安倍郡長として青年団にかかわります。その後内務省明治神宮造営局総務課長として、明治神宮の造営にあたり青年団の労力奉仕を建議。明正選挙運動にも多大な貢献をしました。

こうした田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、その実現に努めることを目的に、毎年田澤義鋪記念会を開催しています。

1) 田澤義鋪記念会総会

10月31日、日本青年館において、第79回田澤義鋪記念会総会を開催し、各地から18名が参加しました。館務報告、会計報告を行った後、神戸女学院大学教授の河島真氏による記念講演「田澤義鋪の政治思想～田澤義鋪が追いつけた理想の政治とは～」をテーマに講演を行い、大正、昭和と田澤の生きた時代をふり返りつつ、田澤が理想とした政治や選挙制度について学ぶ機会となりました。また、田澤義鋪や後藤文夫などが映し出されている戦前のフィルム「大日本連合青年団第12回大会」のフィルムを鑑賞しました。参加者の自己紹介や河島氏を囲んでの懇親会も和やかに行いました。

翌11月1日は、明治神宮の鎮座祭、直会に参列しました。今年度の田澤会への加入状況は個人62名、14団体となっています。

2) 田澤義鋪賞

日本青年団協議会顕彰制度「全国地域青年実践大賞」において、田澤賞を高知県青年団協議会が主催する「学びのココロプロジェクト」に贈呈しました。

3) 第190号『田澤会通信』の発行

3月18日付で第190号『田澤会通信』を発行しました。静岡県の田澤義鋪顕彰会、佐賀県の田澤義鋪記念館の活動、山本瀧之助研究会の活動、さらに田澤が執筆した『旅塵』から「早春」を紹介しました。

9. 国際交流活動

1) 中日青年交流センターとの交流

中日青年交流センターは、1984年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との共同発意により、日中友好21世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により1991年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援・交流するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。

12月21日に政府招待で訪日中の中日青年交流センターの朱昊炜副主任と事務局の崔斌氏が来館され、佛木常務、日青協中園会長、同棚田局長が組織や国際交流の現状や今後の交流に関する意見交換を行いました。

10. 関連事業

1) 全国青年会館協議会

各県における青年団運動の拠点としての役割を担う青年会館の建設は、昭和 25 年 2 月の佐賀県青年会館がスタートでした。その後、各地に青年会館の建設運動が起こり、現在 22 の都道県に青年会館があります。それらの青年会館同士の連絡協調と青年団体の振興、地域社会の発展を図ることを目的として、全国青年会館協議会が組織され活動しています。

主な活動内容は、財団運営に関わる研修、青年団をはじめとする青少年団体への支援、施設運営のノウハウの相互交換など多岐にわたっています。今年度は以下の活動を展開してきました。

(1) 全国青年会館協議会総会

7 月 2 日～3 日の日程で、滋賀県青年会館において実施し 14 会館より 19 名が参加しました。当日は、施設の老朽化や職員の高齢化など、現在の建物や団体、公益事業などをどのように次世代へと継承していくかについて、意見交換が行われました。翌日は石山寺や平等院を視察し全体日程を終了しました。

(2) 全国青年会館協議会理事長会

10 月 31 日に日本青年館において全国青年会館協議会理事長会を実施し、11 会館より 14 名が参加しました。田澤会総会と合同のプログラムとし、神戸女学院大学教授の河島真教授を講師に迎え、「田澤義鋪の政治思想」と題した講演を行ったのち、戦前の貴重な映像資料である「大日本連合青年団第 12 回大会」を鑑賞しました。その後の理事長会では、建物の老朽化や法人のあり方など、各会館が直面する諸課題について情報交換をしました。翌日は明治神宮の秋の大祭に参加しました。

2) 全国青年団 OB 会

(1) 全国青年団 OB 会第 42 回総会・香川大会

香川県青年団 OB 会ならびに地元実行委員会の全面協力のもと、2024 年 9 月 29 日・30 日に、香川県高松市のホテルパールガーデンにおいて全国青年団 OB 会第 42 回総会・香川大会を開催しました。香川県外からは 26 道府県 127 名の申し込みがあり、香川県内からの参加者等 69 名と合わせて、総勢 196 名の参加となりました。

総会では特別報告として、能登半島地震被害の半年を経た状況、大会 1 週間前に襲った集中豪雨の実情を、石川県珠洲市の時兼秀充さんから報告していただいたほか、OB・OG 会や会館の現役支援の取り組みについて、福井県・香川県・大分県の各県から報告をいただきました。交流パーティーは、隣県徳島県丹生谷清流座の皆さんによる人形浄瑠璃や香川の名産品でもある盆栽大抽選会でおおいに盛り上がりしました。

翌日は瀬戸内海国立公園屋島を散策し、源平合戦の古戦場でもある歴史と自然を満喫し、お別れ昼食会はさぬき麺業うどん体験道場大食堂でうどん県でもある香川のうどんを堪能し、滋賀での再会を約束して 2 日間の幕を閉じました。

(2) 令和6年能登半島地震支援募金の取り組み

2024年1月1日に発生した石川県の能登半島地震では、その2か月前に全国OB会を開催した七尾市和倉温泉も大きな被害を受けました。各道府県OB会からも支援の声が高まる中、石川県青年団協議会と日本青年団協議会に協力する形で、震災から間を開けず、1月中に全国のOB会などに支援金の協力を呼び掛けました。全国青年団OB会がとりまとめた808,000円、全国青年会館協議会がとりまとめた609,878円を含め、日青協に集約された1,794,287円が、日青協定期大会（2024年5月12日）にて石川県団に手渡されました。また、継続的に募金を行っているOB会もあり、2025年3月時点で全国OB会に寄せられた23,707円を日青協に引き渡しました。

(3) 日青協地域実践大賞 特別賞「全国青年団OB会賞」

日青協の地域青年実践大賞の審査会が2025年2月14日に行われ、特別賞「全国青年団OB会賞」を、富山県五箇三村連合青年団の映画『HAGAYASHI』が受賞いたしました。3月16日の日青協理事会において、賞状と副賞が授与されました。

3) 大九報光会

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が1950年（昭和25年）11月1日、明治神宮御鎮座30年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。今年度は田澤義鋪記念会および青年会館協議会とともに11月1日に実施された明治神宮の秋の大祭に参列しました。

4) 清溪フォーラム行政懇談会

12月13日～14日にかけて宮城県大崎市において、標記事業を開催しました。参加者は以下の通りです（敬称略）。

山梨県甲斐市長	保坂 武
宮城県大崎市長	伊藤 康志
宮城県富谷市長	若生 裕俊
宮城県川崎町長	小山 修作
宮城県議会議員	伊藤 吉浩
黒川森林組合組合長	石垣 英孝
元山形県南陽市長	塩田 秀雄
日本青年館理事長	大西 倉雄
総務部長	松尾 直泰

現地では、日本語学校を核とした多文化共生や、有害鳥獣駆除と新たな名産品づくりのための「大崎ジビエ」の取り組みなど、いずれも廃校を活用した取り組みを行う施設を視察しました。翌日は、「宇和島みかんフェア」でにぎわいを見せていた「あ・ら・伊達な道の駅」を視察しました。

5) 社会教育士実習生の受け入れ

2020 年度から始まった社会教育士の制度に係る実習生の受け入れを継続的に行っています。今年度は東洋大学 7 名、駒沢大学 3 名、早稲田大学 5 名、計 15 名の実習を受け入れました。8 月末から東洋大学と駒沢大学より実習生を受け入れ、初回の実習では日本青年館のホテル運営や公益事業など財団全体への理解を深めるオリエンテーションを実施しました。11 月からは早稲田大学より 5 人の実習生を受け入れ、全国青年大会や全国民俗芸能大会、オーケストラフェスタの準備や運営に携わってもらいました。

また 12 月には、実習生全員を集めたワークショップを行い、社会教育士として必要なスキルを学んでもらい、また学校を超えた実習生同士の交流を深めてもらいました。また 3 月には実習を終了した学生を集め、実習の振り返りの会を実施しました。それぞれが実習した主催事業の話やこれから社会教育実習で学んだことをどう活かしていくかなどについて、意見交換を行いました。加えて昨年度から開始した日本青年館で実習をした学生による継続的な学びや情報交換会の場となるよう SNS を使った緩やかなネットワークに加入していただきました。

11. 後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援・協力をした事業は下記のとおりです。

1) 国際音楽の日 2024 シンポジウム in 東京

(主催：全国生涯学習音楽指導員協議会)

※後援名義使用

2) 第 50 回太陽美術展

(主催：太陽美術協会)

※後援名義使用、日本青年館賞提供